

ファレイヌ

第1話 復讐の弾丸

福富雅樹【著】

登場人物

椎野美佳……高校生

椎野律子……美佳の姉

北条隆司……美佳の恋人

氷川栄二……律子の恋人

フェリカ……謎の男

1 魔女狩り

一五九八年。南フランスのある村。

深夜、森の奥深くにある教会堂を松明を手にした大勢の村人たちが取り囲んでいた。

村人たちは一様に殺気立っており、いつ何が起きてもおかしくなかった。

「悪魔よ、姿を現せ！」

村人たちが叫んだ。

血気にはやる者は既に教会の窓に向かって石を投げつけていた。

教会の扉が開かれ、一人の黒い法衣を来た黒髪の少女が現れた。

「お父様、おやめください」

少女は前に進み出て、村人たちの中心にいる一人の初老の男に大声で言った。

「カトリヌ、もはや手遅れだ。捕まえろ」

少女の父が指示すると、屈強な二人の村人が少女の両腕をつかむ。

「何をなさるのです？あなたたちはご自分が今、何をなさろうとしているのか、わかっているのですか」

少女は激しく抵抗した。

村人は少女を押し倒し、法衣を引き裂いた。

少女の法衣の下は全裸であった。しかも、異様な数字の刺青が全身に刻まれている。

「何と言うことだ……」

少女の父は頭を押さえた。

「わたくしに手を触れたこと、必ず天の裁きが下りますわ。フェリカ様に仇なすこの悪魔ども!!」

少女は、村人たちを大きく見開いた目で睨みつけた。その目には激しい憎悪が感じられた。

「燃やせ……」

少女の父が静かに言った。

村人たちは少女の両手を後ろ手に縛ると、少女の顔に油の染みこんだ袋をかぶせる。そして、手にした松明で袋に火をつけた。

袋をかぶった少女の頭が勢いよく燃え上がり、少女が地面をのたうち回った。数分後、少女が地面で動かなくなると、斧を持った村人が少女の首を切断した。

「悪魔を殺せ!!!」

村人たちの間で声がわき起こり、興奮した村人たちが教会の建物の外壁に一齐に油をまき、火を放った。

「フェリカ様、教会に火が放たれました」

教会の地下室に一人の少女が駆け込んできた。

地下室では、山羊のマスクをつけた半裸の男が、祭壇の上で儀式を行っていた。魔法陣が描かれた祭壇の前に床には、時計の針のように頭を外側に足を内側に向け、仰向けに寝ている全身刺青の十二人の少女たちがいた。

少女たちの頭のそばには、それぞれに違う金属の粉末が盛られている。少女たちは目をつむったまま、恍惚の表情を浮かべている。

「フェリカ様、逃げなくては皆、死んでしまいます」

「エリナ、既に村人は皆、悪魔に支配され、この場を逃げても、いずれは処刑される」

「では、どうなさるのですか？」

「一つだけ方法がある。粉化転生術を使うのだ。この術は、人間の魂を一時的に別のものへ転化させる術だ。ここに十三種の粉末がある。この粉末に一時的

に君たちの魂を吹き込み、それを瓶に入れて私が隠しておく。残った肉体は仮死状態となつてゐるから、村人や官憲が見ても死んだとしか思わないだろう。そこでおまえたちの肉体を一時的に墓に埋め、折りをみて私がその肉体を墓から掘り出し、魂を元に戻してやろう」

「しかし、フェリカ様……」

「おまえは私の言葉が信じられないのか。さあ、これを飲むがいい」

男は少女に液体の入った杯を渡した。

「わかりました……」

少女は両手で持った杯の中の黒い液体を一気に飲み干した。

頭を突き抜けるような激しい快感と共に少女は意識を失い、その場に崩れた。「喜ぶがいい。おまえたちはこれから永遠の命を手に入れ、来るべき日に私の力となるのだ」

2 謎の女

一九八九年六月。日本・宮城県仙台市。

晴天の空の下、私立青海中学校校舎中庭のテニスコートでは、放課後、硬式テニス部の練習試合が行われていた。

五セットマッチによるシングルス。この試合には、一般の生徒たちだけでなく、教師たちまで観戦に集まり、コートの周囲はギャラリーで埋め尽くされている。

それというのも、試合をしているのが、春の全国選抜中学テニス大会シングルス優勝者、椎野美佳だからである。

対戦相手は彼女と同じ中学三年生の男子部員だが、実力の違いは圧倒的であった。美佳がストリートで二セットを連取し、三セット目も五ゲーム連取。まだ、一セットはおろか一ゲームも失っていない。

「40-0（フォーティ・ラブ）」

審判の声があがる。

美佳のサーブミス・エースで、試合は美佳のマッチ・ポイントとなった。

「すごい、すごすぎるう」

下級生の部員が興奮気味に言った。

「静かに」

上級生の部員が注意する。

全てのギャラリーが次の一球が最後であることを確信し、固唾を呑んで見守っていた。

美佳はボールを頭上にトスし、怒声を発して、ラケットを振り抜いた。打ち込まれたボールが相手コートの中の選手のサーブライン手前で弾むも、そのボールが大きく右利きの選手の左側に弾み、選手がラケットを出すのが間に合わなかった。

「ゲームセット！ゲーム&マッチ・ウォン・バイ・椎野。スコア・イズ・6・トウ・0」

審判が美佳の勝利を告げた。

その瞬間、ギャラリーから歓声と拍手が上がる。

美佳はコートの中で男子部員と握手し、ベンチの方へ歩いていった。

「椎野先輩、お疲れさまです」

すぐさま、後輩部員が用意していたスポーツタオルを差し出す。

「ありがとう」

美佳はタオルを手を取った。

「もう中学生じゃ相手にならないんじゃない？」

「手加減してあげたらいいのに」

同級生部員がからかい半分に美佳に声をかけた。

「何事も全力でいかないとね。さあ、みんな、どいてどいて」

美佳はギャラリィをかき分け、体育館のロッカールームにあるシャワー室へ向かった。

美佳クラスの手になると、特別待遇でシャワー室は貸し切り状態となる。ロッカールームにはその間、誰も入らないように入口で後輩部員が見張っている。

ロッカールームで服を脱ぎ、全裸になった美佳は、シャワー室で水量を全開に出し切ったシャワーをしばらく全身に浴び続けた。

「素晴らしい試合だったわ」

突然、女性の声が出た。

誰もいないと思っていた美佳は驚いて、シャワーを止め、声の方を見る。

そこには服を着た金髪で白い肌の若い女が立っていた。

「誰？」

その女性に美佳は見覚えがなかった。

「あなた、椎野律子の妹でしょ」

「……」

何なの、この人。

「私ね、あなたの体が欲しいの。いいでしょ」

女はそう言うと、不気味に微笑んで、美佳に向かって歩き出した。

3 逃走

一年後。日本・東京。

十二階建てのマンションの五階。

「ふわああああ」

椎野美佳は、部屋からベランダに出て大きく伸びをして、外の空気を存分に吸った。

美佳は、深夜のテレビの見過ぎで夕刻までずっとベッドで熟睡していた。しかし、空腹に勝てず、やっと起きたのである。

「腹減った、腹減った、腹減ったー」

などと美佳はリズムをつけて言いながら、台所に戻った。

テーブルの上のトーストを袋から二、三枚取り出すと、オーブントースターに放り込み、ダイヤルを回す。

「これで準備完了」

美佳は大きなあくびをしながら、椅子にどつと腰掛けると、朝の新聞に目を通した。

その時、待ちかまえていたかのように電話が鳴った。

「座ったばっかなのにい」

美佳がぶつぶつ言いながら立ち上がり、電話を取った。

相手は声優事務所のマネージャーであった。美佳は学業の傍ら、声優をやっているのである。

「こんにちは。今日はどうしたんですか」

いつもの愛想のいい口調で尋ねた。

「どうしたじゃないよ、美佳ちゃん。今日は五時からアフレコの仕事だろう」とマネージャーは呆れたように言った。

「やだー、そうでしたっけ」

「しつかりしてもらわなきゃ困るよ。君一人でスケジュールが動いてるわけじゃないんだから」

「どうもすみません。必ず行きますから」

「すぐに頼むよ。場所はいつもの第五スタジオだから」

そう言つてマネージャーの電話は切れた。

「そつか、今日は仕事だったけ、すつかり忘れたわ」

美佳はペロツと舌を出した。

「何をニヤニヤしてんの。気持ち悪い」

玄関から聞いたことのある声でした。

ギョツとして声の方を見ると、美佳の姉、律子が立っていた。律子はいつになく恐い顔をしている。

現在、美佳と律子の姉妹はこのマンションで生活をしている。両親は仙台。東京の高校に強引に進学を決めた美佳を一人で生活させるのは危険と考えた故郷の両親が、先に東京で生活している姉のマンションと一緒に住まわせたのである。

「あ、あのね、あたし、これから出かけるところなんだ」
美佳は急いで着替えを始めた。

「駄目よ」

「姉貴に関係ないでしょ」

「学校はどうしたの？」

「自主休校」

「昨日、担任の先生から電話があつたのよ。あんた、ここのところ、ずっと学校、サボってるそうじゃない。言い訳するの大変だったのよ」

「感謝してます」

「学校が嫌なら、仙台に帰ってもらおうかしら」

「そんなお姉さま。何もそこまでなさらなくとも……」

「急に言葉遣いを変えるな。気色悪い。とにかく、今日はあんたに説教するために仕事を切り上げてきたんだから、家から出さないわよ」

「これから、仕事なの。小言は今夜聞くから」

「駄目」

律子はきっぱり拒否した。

そんな時、玄関のベルが鳴った。

律子が玄関に応対にでると、

「美佳、北条くんよ」

と美佳を呼んだ。

「久しぶり。何か用？」

美佳は玄関に出迎えると挨拶した。北条隆司は美佳の中学時代からのボーイフレンドで美佳の三歳年上の大学生である。

「人を誘つといてそれはないだろう」

「ええっ、嘘だー」

美佳は目を丸くして言った。

「嘘なものか。一昨日、電話で映画に行く約束したじゃないか」

「おかしいわ、そんなことを言った覚えはないけどな……」

美佳がうーんと首をかしげて考えているところへ、

「すみません、椎野さんのお見舞いに来たんですけどーああつ、美佳」

と隆司に続いて美佳の学校の同級生が玄関に現れた。

「やあ、元気？」

美佳はアウトドアルックの自分の姿を同級生に見られて、気まずい顔になった。

「げ、元気そうね？」

と同級生の一人が疑わしい顔をして聞いた。

美佳は困った顔をして、姉に視線を向けた。しかし、律子の方はもう勝手にしなさいとばかり、そっぽを向いている。

「ねえ、みんな……」

美佳は申し訳なさそうな顔をして、廊下に出ると「ごめんねー」と言っ、エレベーターの方へ逃げだした。

突然の美佳の行動にあっけにとられた北条や同級生たちはしばらくその場に立ち尽くしていた。

4 姉の姿

「おつかれさま」

午後七時、有楽町の第五スタジオではアニメ番組のアフレコが終了し、別れ

の挨拶で賑わった。美佳もその一人。スタジオの外の廊下では声優やスタッフが皆で飲みに行く打ち合せなどをしながら、がやがやと歩いている。

しかし、美佳の方はそんなゆっくりしている余裕もなく、早く家に帰ろうと急いで歩いていった。

「あんまり遅くなると、姉貴がうるさいもんね」

それから、美佳は四十分ほどしてマンションに着くと、偶然にも入口で姉の姿を見つけた。美佳は声をかけたが、律子には聞こえなかったらしく、小走りで行ってしまふ。

「どこへ行くんだろ。あんな深刻な顔をした姉貴、初めてみた」

美佳は妙に気になって律子の後を尾行した。

行き先はまっすぐ駅に向けられていることに美佳は途中で気づいた。そこで美佳は姉の先回りをして、駅で待つことにした。

案の定、律子は駅にやってきた。しかし、電車に乗る様子はない。誰かを捜しているようだ。

美佳はもう少し隠れて、姉の様子を見ることにした。

ほんの数分して、律子が手を振って電話ボックスの前に立っている男に走り

寄つていくのが見えた。美佳には全く見覚えのない男であった。

「見つけたぞ」

「きやつ」

ふいに肩を誰かに触れられ、美佳は悲鳴を上げた。振り向くと北条であった。
「ちよつとお、びつくりするでしょ」

美佳が向きになって怒った。

「そう怒るなつて。今日の約束、破つたんだ。これでおあいこだろ」

「それとこれとは別。私、これでも心臓が弱いのに」

「どこまでも嘘つきなんだよ、おまえ」

北条が笑った。

「うつさいなあ」

と言つて電話ボックスに視線を投げかけたが、もう律子や男の姿はなくなつていた。「隆司のバカ！姉貴の姿、見失つたじゃない」

「律子さんがどうかしたのか？」

「今ね、姉貴が私の知らない男と会つてたの」

「別にいいじゃん。律子さんだつて立派な女性だし、恋人の一人や二人いたつ

ておかしくない」

「それはそうだけど……」

「それより、偶然、会ったんだし、飯でも食いに行こうぜ」

「あたし、今、そんな気分じゃ……」

そう言いかけた時、美佳の腹が鳴った。

「どんな気分なんだよ」

北条がニヤニヤして尋ねた。

「もうっ、食べにいくんなら、早く行こっ」

美佳は顔を真っ赤にして、歩き出した。

5 別れ話

「私と別れたって……嘘？」

律子は信じられないという面もちで男に問いかけた。

「ごめん。本当だ」

男は聞き取れないような小さな声でうつむきかげんに言った。

窓一面に夜景を映し出すレストランの一席で男と女の別れ話が静かに行われていた。

「いやよ、そんなの」

律子は大きく首を振った。

「わかってくれ。僕は君のことを決して遊びでつき合っていたつもりはなかった。もし、今度の話さえなければ君との結婚も決意したかもしれない」

「社長の娘と結婚するっ話ね」

「そうだ。僕にとつてはまたとない出世のチャンスだ。今まで大した学歴もない僕がやつと手にいれた栄光だ」

「そんなの身勝手よ。あなたは愛よりも出世を選ぶと言うの。それも実力ではなく、他人の力を頼って」

「他人の力だつて！冗談じゃない。僕は彼女の心を射止めるのに二年を費やしたんだ——」

男は余計なことを言つたと思ひ、慌てて口をつぐんだ。

「とうとう本音を出したわね。最初っから私は単なる遊び相手に過ぎなかつたんでしょ」

「それは――」

男は言葉に戸惑ったが、やがてくすくすと笑いだして「そうだよ。君の言うとおりさ。僕はこれでもプレイボーイでね。清純で身持ちの堅い女を見るとなんとかして自分のものになろうと独占欲にかられるのさ」

「あなたって人は……」

律子はぎゅつと肩に力をいれた。

「どうか。やつと夢から覚めたご気分は」

彼は愉快そうに笑った。もう律子へのいたわりなどまるでなかった。

「あなたの将来を破壊してやるわ。絶対に」

律子に怒りに身を任せて言った。

「どうするんだ。僕の婚約者に私は僕の愛人でしたとも言うのかい。残念ながらそれは無理だろうね。もしそんなことすれば、君は自分を男に持て遊ばれた女としてまわりにさらすことになる。そうなつて一番悲しむのは君の妹さんじゃないのかな」

「ううっ」

律子はうつむいて今の怒りを必死に抑えた。これもかわいい妹のため。仮に

今の怒りをなおもぶつけ、この男をあざけり罵つたとして後には何も残らないことが律子には分かつていた。

「僕と別れてくれるね。そうすれば僕も君とのことはいつさい忘れる」

男の問いかけに律子はうなずいた。「ありがとう。それじゃあ、僕は帰るよ、なるべく君と会っているところは見られたくないんでね」

男はレシートをテーブルの上から取ると、その場を去つた。

その時、律子の隣の席ではサングラスをかけた金髪の男がワイングラスを片手に二人の話を興味深げに聞いていた。

6 姉の帰宅

「姉貴、遅かつたじゃない」

テレビを見ていた美佳はドアの開く音を聞いて早速玄関に出迎えた。

「ごめんね。久しぶりに友達と会って、話し込んだじやつたの」

律子は笑顔で言った。しかし、その顔は涙で腫れ上がったように真っ赤になつていた。

「そう……」

「そんなことより、夕食はちゃんと食べた？」

「外で済ましてきたわ。姉貴、お風呂入る？」

「今日は寝るわ。はしやぎ過ぎて疲れちゃったから」

その返事は心なしか元気がなかった。

律子は美佳にお休みと一言言つて、寝室に入つて行つた。美佳はまた椅子に座つてぼんやりとテレビを見た。

姉貴、やっぱりあの男と何かあつたんだ。

どうにも気になり美佳はすつと立ち上がつて律子の寝室に足を寄せた。そして、多少ためらいがちにノックして、

「姉貴、起きてる？」

とドアごしに尋ねた。しかし、返答はない。美佳はドアを少し開け、中を覗き込んだ。中は真つ暗だった。

私の考えすぎかな

美佳がドアを閉めようとした時だった。微かな声が闇の中から聞こえてきた。

「姉貴……」

美佳のノブにかかる力が強くなった。
その声は律子の咽び泣きの声だったのだ。

7 忘れもの

「梶谷くん、おもしろいもの、見つけたよ」

レストラン『ハイウェイ』のウェイトレス森口は店内で開店の準備をしていたウェイターの梶谷を、手を振って呼んだ。

「なんだよ、さぼつてると益田さんに怒られるぞ」

梶谷はめんどくさそうな顔をしながら、森口のところに行ってくる。

「今、掃除したら、これが椅子のところ置いてあったの」

と言つて森口が見せたのは金色の拳銃であった。

「おい、これは！」

梶谷が目丸くして驚いたのを愉快そうに笑つて、

「やだ、梶谷くん。本物じゃないって。ただのモデルガンよ」

「なあんだ。それにしてもよく出来てる。この重さとか、大きさとか。俺、フ

イリピンで本物の銃、見たことあるけど、そつくりだぜ」

「そつくりなだけよ。大体、これが本物だったら、椅子の上に平気で置いておく？」

「それもそうだな」

「でしょう。とにかく、これを持ち主に返さないかね。これだけリアルな銃なら本人にとつては大事なコレクションかもしれないし」

「そうだね。この席に座つてた客なら見覚えある。いつも来てくれる女の人だ」
「それなら今度来たら渡してあげなさいよ。でも、それをきつかけにその人と親しくなるうなんてことしたら承知しないからね」

「わかった、わかった」

「こらっ！掃除は終わったのか」

店長の益田の怒鳴り声が聞こえてきた。

「いけね。さあ、早く終らせようぜ」

梶谷は慌てて調理場に戻って行った。

8 朝

翌朝の律子はいつともかわらず元氣であつた。かえつて美佳の方が当惑してしまつたほどである。

「姉貴、大丈夫なの」

「何が？」

「何がって……」

言い返されると美佳には言葉がなかつた。仕方なしに美佳はこれ以上、姉に何かを聞こうとも思わず、食べることに集中した。

「美佳、行儀悪いよ」

美佳の物凄い食べっぷりに律子が呆れて言つた。それは、とても高校生の食欲とは思えなかつた。

「うちでくらい気の向いたように食べさせてよ」

「でもさ、よくあんた、こんな毎日に毎日食べて太らないわね。ブラックホールじゃないの」

「ふんだ、食べることの楽しさを知らない人にこの気持ちは分からないですよーだ」

「そんなものですかね。あ、ほら、もう四十分過ぎてる。遅刻するわよ。今日はサボらせないからね」

「もう十回以上遅刻してるんだから、今更気にするほどのこともないわ」と遅刻常習者は平然としている。

「行つてきます」

美佳はそれから、二十分後、ようやく家を出た。

「全くあの子は時間というものを知らないのかしら」

律子はすでに八時をさしている時計を見ながらため息をついた。

その後、軽く台所の片づけを済ませ、律子は家を出た。

早くあの男のことは忘れなきや。

律子はそう心には言い聞かせていたものの、職場への足取りはとても重かった。たとえ彼と別れたとはいえ、これからも毎日のように職場で顔を会わさなければならぬと思うと、律子はどうにもこみ上げてくる怒りを抑えることが出来なかった。

どうにか駅前まで来ると、律子は、昨日入ったレストラン『ハイウェイ』に入った。律子はこの店の常連であった。

窓際の席に座り、注文を済ませると、五分ほどでコーヒーが運ばれてきた。

「どうもありがとう」

「あとう」

ウェイターが問いかけた。

「なにかしら」

「昨日、忘れ物なさいませんでしたでしょうか」

「え？」

律子は考え込んだ。物を置き忘れた記憶はない。

「金色のモデルガンなんですが」

「モデルガン？」

ふと律子の目の色が変わって「どんなのかしら」

「ちよつと待って下さい」

ウェイターは一度カウンターに戻って、黄金銃を持ってきた。

「これです」

「これは――」

ウェイターからその銃を見せられた途端、律子はその銃に強く引き込まれる

ものを感じた。

「わ、私のです」

自分の物でもないのに律子は思わず言ってしまった。

「やっぱり」

「私の友達がモデルガンのコレクターで、今度、長期に旅行するので預かって欲しいと頼まれたものなんです。だけど、昨日、途中でなくしてしまつて、ずっと困っていたの」

と律子は照れくさそうに笑つて言った。

「そうですか」

「本当にありがとう。これ、お礼よ、取つておいて」

律子はバッグから紙幣を取り出して、ウエイターに渡した。

「え、そんな、困ります」

「受け取つて。拾つたものを大事に保管しておいてくれたという気持ちがあるの」

そう言うとうエイターは喜んで紙幣を受け取り、戻つて行つた。

一人になつた律子は改めて銃を見直した。律子自身、本物を見たことはない

が、この金色に光る銃身を見てみると本物のような気がしてならなかった。

「もしこれが本物なら……」

律子は銃のフレームから横に弾倉を取り出し、覗き込んだ。

「これは……」

律子は目を疑った。弾倉には弾丸が入っているではないか。それもBB弾などというものではなく、金色に光る実弾であった。

律子はすつと立ち上がると会計を済ませ、店を飛び出した。その時、バックに入れた左手は銃を握っていた。

9 怒りの弾丸

律子はいつもと全く変わらず、加茂川物産に出勤していた。ビルの八階の庶務課に着くまで、彼女はいろいろな思いを巡らしていた。両親との思い出や妹の将来のこと、また彼とつき合っていた頃の楽しい日々。

しかし、庶務課のドアを開け、あの男、氷川栄二の姿を見た時、律子の心は復讐に燃え上がった。

「椎野くん、おはよう」

氷川はにやにやと笑いながら挨拶してきた。

律子はきゅつと唇を結んで鋭い視線を返すだけだった。氷川は別に動じるようすもなく、ただ律子の横を通る際に、

「あまり恐い顔はしないでもらいたいね。同僚が変に思うだろう」と言った。

律子は氷川が部屋を出てからもしばらく立ち続けていた。

「おい、椎野くん、何をぼんやり立っとるんだ。仕事につきたまえ」部長がいらいらしたように言った。

「はい、わかりました」

その言葉は相手の言った意味はどうあれ、律子にある決心をもたらしした。

律子は発作的に飛び出すと、バッグから拳銃を取り出した。そして、銃を構え、まだ先の廊下を歩いている氷川に向かって叫んだ。

「氷川栄二！」

氷川は振り向いた。途端に律子は撃鉄を起こし懇親の力を込めて引金を引いた。

「うわああっ」

氷川の悲鳴が上がった。律子は無意識のうちにつぶついていた目を開けた。氷川は死んではいなかった。ただ、遠くの廊下での銃声に驚き腰を抜かしただけである。律子の弾丸を阻んだものは目の前に立っていた。

「あなたは……」

律子は力を失ったように銃を下に降ろし、男を見つめた。男は金髪の青い目の男だった。彼の白いコートの胸の部分はびっしりと血に染まっている。

彼はゆっくり律子に歩み寄り、今にも倒れそうな律子を抱き止めた。

「これで気が済んだかい」

彼は優しく問いかけた。

「どうして……あんな男をかばったのよ」

律子は男の胸で泣いた。

「君はあんな男のために人生を捨てるのか」

「人生……私の人生は総て彼だったのよ。両親でも妹でもない彼だけだったのよ。だから、私の人生が終ると同時に彼にも消えてもらうの」

「それは君の本当の言葉じゃない。君は一時の衝動に自分を失っているだけだ」

男は律子の肩に軽く手を乗せ、言葉を続けた。「この銃はおもしろい銃だね。人が激しい感情を覚えた時だけ、撃てるんだ」

「まさか、銃に感情なんてあるはずないわ」

「だったらいま一度撃つてみるといい」

律子は男から離れ、銃を構えた。氷川は驚いて床を這って逃げる。しかし、二度とその引金は引けなかった。

「な、なぜ……」

「君の復讐欲が薄れてしまったからさ。つまり君が自分の理性を取り戻したっことさ」

男は律子を見つめた。優しい澄んだ瞳であった。「あの男は殺すにも足りぬ男だ。ここでやめとけば、ただの冗談ですむ」

「冗談……だつてあなたの胸にはこんなに血が流れているのに」

男のコートから床にぼたぼたと垂れている血を見て、慌ててハンカチで傷を覆った。

「俺の体など取るに足らないものさ。またすぐ替えればいい」

「そんなこと、できるわけ……」

突然、男は律子を引き寄せ、唇で言葉を封じた。律子は驚いたように男を見ている。

少しして男は律子を離し、律子の手にしていた拳銃を取ると元のバッグにしまい込んだ。

「消える前にちよつと楽しませてもらったよ」

「あなたは……いったい誰なんです。どうして私を助けてくれるんです」

「俺の名はフェリカ。君を助けたのは俺ではなく、拳銃さ」

男は背を向け、律子を残して去って行く。

「フェリカ……」

律子は呆然としたまま、立ち尽くしていた。

10 エピローグ

「これ本物？」

夕食の時間、美佳は台所で律子に手渡された金色の銃を見ながら言った。「姉貴をふつた男を撃つたんでしょ。よく警察に逮捕されなかつたわね」

「散々調べられた。でも、警察で調べた結論はモデルガンだつて。硝煙反応も出なかつたみたいだし」

「じゃあ、偽物なんだ」

「ううん、本物よ」

「はっ？」

「あなたにはわからないの。この銃はあたしとあの人とを結ぶ大事な絆なんだから」

「あの人？」

「そう、長身で、金髪で、かっこいい外国の男性」

律子は目を輝かせて言った。

「ふうん」

美佳はこんな姉にそんな男がつきあってくれるはずはないと思いつつも、律子の笑顔を見て、ちよつと安心した気分になった。

第1話 「復讐の弾丸」 終わり

初版 一九九一年五月
四訂版 二〇〇八年